

山形短期大学民話研究センター資料叢書

カマイタチ

東根昔話集2
置賜昔話補遺

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

カマイタチ

東根昔話集2
置賜昔話補遺

編
武
田
正

カマイタチ

東根昔話集（2）・置賜昔話補遺

第一部 東根昔話集 2

9	8	7	6	5	4	3	2	1			
仁王とテンコウ	長者ばなし	カマイタチ	二十四孝	姥捨（2）	姥捨（1）	地藏浄土	古屋の漏	カッコー鳥			
									6		
21	18	15	15	14	12	8	7				
									11	10	
19	18	17	16	15	14	13	12		豆腐つくり	狐の鳴き声	
若松観音	太公望のはなし	善光寺の由来	木蓮尊者	新宅振舞い	一休ばなし	医者のはじまり	泥棒の改心				
53	51	47	45	43	42	39	37	30	27		

20	娑婆の念仏	53
21	結句	54
22	昔話のしきたり	54
第二部 置賜昔話補遺 小国町・他		
1	瓜姫子と天邪鬼	58
2	笠地藏	60
3	蛇簪入	62
4	南の山の馬鹿簪 ― 唐傘 ―	65
5	南の山の馬鹿簪 ― 風呂 ―	65
6	玉川太郎と慶次之介	66
7	果てなし話	67
8	姥捨	68
9	かちかち山	69
10	田の神団子	74
11	神武天皇のはなし	75
	あとがき	77

東根昔話集（2）は『木小屋の生活
民話序
説』に掲載の東根昔話集の続篇である。

第一部

東根昔話集

2

1 カッコー鳥

あるところに親父とかかいて、かが後妻で、そこに一人のカッコという子どもがいたそうだ。

そしてかが後妻なもんではけて、親父がカッコばり心配していんなだけそうだ。そしてあるとき、親父が泊りから帰って来たらいねなだけ。

「カッコどさ行つた、こら」

「カッコは山さ、おつつあま夜上り遅いはげて迎え行つたんだ」

「んだか」

て、ハンバキ、親父が上り場で脱いんだんだけそうだけんど、片方脱いで片方脱がねなだつけ。

「迎え行つて来んなね」

そして山さ行つて、「カッコ、カッコ」て呼ばっけんど、カッコはいねていうん

だな。「どこさ行つたべ」て、そしてどこまでも探ね歩いて行つたど。

(横尾高治)

2 古 屋 の 漏

むかし、じさまとばさまの夫婦いて、じさまとばさまで、夜雨すずろに降つどき、狼がサマの外にいて、年寄りば食つて呉んべと思つて来たつて言うんだな。そいつ知しやねで、じさまばさま二人いて、ばさま、

「じんつあ、じんつあ、狼なの来たら恐つかないべなあ、じんつあ」

そしたら狼は外に待つてだつたな、聞いて、

「なあに、ばさま、狼なの恐つかないげんども、ナルとモル一番恐つかない」
それから、狼なの、

「世の中におれより恐かないものないべと思つていたが、ナルとモル一番恐つか

ないていう。ナルとモルぎあ、おれよりえらいものあいたんだか」

て、魂消て逃げて行つたけど。そしてじさまとはさま難逃かつたけど。

(横尾高治)

3 地 蔵 浄 土

庭掃除したところが、豆ころげておつた。

「この豆、どこまで、溝の穴の穴まで」

て言うて、ころころ転んで、穴の中さ入って行つたど。すつど、そのじいさんがその穴をのぞいたところが、にわかになくなくなつてじいさ入られるような穴になつたど。その穴くぐつて行つて見たところが、地藏さんが立つておつたど。

ところが地藏さんさお詣りしていとところが、地藏さんが口たつて、

「じさま、じさま、膝さ上がれ」

「なんだて、地藏さま、もったいなくて膝さなの上がらんね」

「ええから上がれ」

こういう風に言われた。んだから、

「んだらごめんしてけらっしゃい」

て言うわけで、膝さ上がって、

「いや、こんど、じさま肩さ上がれ」

「いや、膝ささえじつと、もったいなくて上がったんだから、とても肩さなの上
がらんね」

「ええはげ、上がれ」

て言われて、

「んだら、ごめんしてもらいたい」

て、肩さ上がったって。したら、

「頭さ上がれ」

て、こう言うた。

「とつても、足曲がつさげ上がらんね」

こう言うて、じさまが言つたところが、

「足なの、曲がらね、じさま上がれ」

て言われて、じさま上がつて、こんど、「裏板さ上がれ」て。そうすつど、

「晩に、鬼だ博奕打ち来る。そして金どつさり背負つて来んのだから、ほんどき夜明けまで鬼だ博奕打ちやってくるのだから、そのときお前鶏の鳴き声しろ。そうすつど夜明けだと思つて鬼だ逃げて行んから、ほんどきお前、金みな持つて行け」

て教えらつた。ところが案の如く鬼だぞろぞろ金背負つて来て、博奕はじめたど。そしてええあんばい楽しんでゐるときに、まだまだ夜明けまでには早かつたげんども、地藏さまの言うとおり、「コケコッコー」て、トキの声を上げたど。ところが夜明けたというもんで、鬼だ金はみな置きっぱなしにして逃げて行つてしまつたど。

「じさま、みな金集めて持つて行け。そいつはお前日頃信心していっさげ、お前

屁の音したつていうんだ、大きな、ブウーッて。

「なんだて、屁の音したんねが」

「いや、屁など、んねべ」

「なえだか臭くなつて来た、なえだか人いたんだな、人あくさい」

なてよ。そして見つけらつてよ、よくよくいじめらつて、傷だらけなつて帰つて来たてよ。泣いて。ばさま、

「おら家のじさま、地藏さまから赤い着物もらつて、喜んで歌つて来る」
て。そして家さ帰つて来てみれば、傷だらけだけ。とんびんさんすけ。

(伊藤正作)

4 姥 捨(1)

あるところに孝行な息子いたんだけな。その当時、年寄り六十才になつて、山

さ捨てて来らんね慣わしになつていたんだけど。そしてそうなたはげて、背負つて山さ登つて行くのだけど。それで道わかんねぐなべて、そのばんちや、みな木曲げて折つて行つたんだど。そして行つたんだげんど、その息子だけ投げて来らんねんだど。そしてまた連^せてきて穴倉^いさ入つて、みんなの目のつかねぐして食いもの食せておいだけど。

そしてあるとき、殿さまの「触^けれ」で灰で百尋縄なつて来つど、うんと褒美^け呉る言うなで、みんな縄なつたげんど、仲々なう人いなくて、その人、穴の中さ入つて行つて、そのばんちやさ聞いたれば、

「縄なつて、縄は焼くどええ」

て教えて、その縄なつて焼いて、殿さまどさ持つて行つて褒められたど。そしてまた、

「打たずに鳴る太鼓もつて来い」

て言わつて、また聞いたたら、太鼓さ蜂入つて拵えてもつて行つて褒めらつたという話だ。

5 姥 捨（2）

むかしあるところに年寄りいだけど。息子、親いらねくて捨て行つたのよ。そして沼さ入れんべと思つて、一生懸命に、ばんつあは入つだぐないという、息子はいちねていうどこさ、お役人が来たんだげど。ところが親が、

「おれも年もいったし、なえつたて家さ帰らね」

て言うのだけんども、おらえの息子は、

「年寄りいなくて世の中うまく行かねから、なえつたて捨てて行かんね」

て言うなで、困つていたどこだて言うたど。そして「なるほど」て、そういうことなつてから捨てねぐなつたんだど。

（横尾高治）

6 二十四孝

八十才になった年寄りば、山さ捨てらんなねぐなつたげんど、それよりも自分の子ども代りにやんべて、三つになるおぼこを、山の松の木の下さ埋めて来いて言わつで、八十才になるおぼんちやさ乳のまさんのだけな。

そして三つになるおぼこを埋めつどて掘つてみたれば、金の茶釜出はつたて。んだから親孝行して、子ども埋めて親ば大切にすんべて。「神を拝めば、親拝め」て言うのだど。

(安部はる)

7 カマイタチ

人が死んで、まっすぐ極樂さ行んか、地獄さ行んかと思つたれば、地獄の煙出

しさ突つかえったていうのだな。そして煙出しさつかえって中見たれば、赤鬼青鬼いっそう博奕打ち、カマスさ銭すこだま立てて並べて、博奕打ちしったていうのだな。そうしたれば死んだ人、金好ましくなつてはあ、

「はあて、この金何とかして娑婆さ持ち帰りたいもんだ」
ほうして、出まかせに、

「カマイタチだ」

て、そこさ落ちて行つたそうだな。したれば鬼だも魂消たずも。恐つかながつたがして、カマイタチ来たていうもんで、そさカマスがらみ、ぶつちらかしてみな逃げたていうのだな。欲たかりじさま、金、こんどきだて、カマスさ入つて持つて、娑婆さ生き返つて来たていうなよ。ほうして福しくなつたのだな。そうして福しくなつたれば、隣のじさまも欲たかりだがして、

「何^{なえ}つたて、隣でこの頃死んだつうげんども、金すこだま背負つて来たていうごんだ。なぜな関係だべ」

たて、聞きたくて聞いたていうなだな。したところが、

「おれ、死んで極楽さ行くべと思つたら、地獄さ行つて、地獄の煙出しにつつかえつて、そうして煙出しから眺めていたれば、こんどは鬼、カマスさ金すこだま立てて博奕打ちしつたけ。そうしたばその金好ましくなつて、この金を何とかして持つて行きたくなつて、でまかせへカマイタチだ」て落ちて行つた。したれば鬼あカマイタチ来たていうもんで、みな金置き去りにして逃げた。その金を持つて来たんだ。そして金持ちになつたんだ」
て言うたていうのだな。

「おれも死んで真似すんなね」

て、そして死んで行つたれば、やっぱり変わらず地獄の煙出しさ行つたて。したれば案の如く青鬼赤鬼博奕打ちしつたて。そこさ金ひろげてよ。ほうして欲たかりじさまだから、金好ましくて、前の親父と一緒に、

「カマクラエビ！」

て落ちて行つたど。したどころあ、鬼だ、カマクラエビ来たていうもんで、たちまち鬼だに食つてしまつたど。金一文も持つて来ねで食つてしまつたど。んだ

から人の真似事するもんでない。

(横尾高治)

8 長者ばなし

むかしむかし、あるところにすばらしい長者がいてやったど。

ところでこの長者はもつとも長者たかわり、家の中などは、とんでもなく立派に拵え、殿さまの御殿にもまさるような普請であつたそうだ。ところがその家で今まで使っていた女中が、まず嫁に行くとか何とかで、女中が一人いなくなつていうのだな。何とかして代りのもの探ねっだいっていうことになつて方々探したげんど、なかなか人は見当んねていうのだい。

ところが山の中から誰かが口入れして、娘ば連れて来たていうのだな。ほんで、「この奴は人は正直で堅いからええでないか」

て言うので、

「ほんでは使つてみんな、そんでええたれば置くし、悪ければ返す」

て、ほの女中をあずかつたわけだ。ところが仲々な娘だはげて、朝起きはええ、というとんでもない、ここらうち、朝げは暗いうち起きて、お庭から何から掃き掃除する、拭き掃除する、家の中はする、とにかく働きもんだというんだな。ほうしているうちに外廻りして家の中の拭き掃除する、そして雑布持^たつて来て、みな拭いたというんだな。

ところがその旦那目覚まして見たれば、床の間、雑布で拭い^ったわけだ。そんなで旦那ごしやえで、

「この床の間でいうのはすばらしい床の間だから、雑布でなの拭くのでない。雑布なていうのは板の間とか流し前とか、こういうどこは拭くのであつて、そういうところを拭くのではない。物識らずもほどがある。そつけな者置かんない」

て、そうしてはあ、暇出したわけだ。旦那、気に合わなくて置かんねていうなはげ、仕方ないごてはあ、てその家から出はたていうわけだ。そこさひよっこり

その旦那の歌よみの先生が来たていうのだ。そうして、

「実はこういうわけで、おらえに女中が一人いなぐなったについて、どこか遠かいところの山中から娘たのんで来て置いてみた。ところが事もあろうに、床の間板の間とか流し前拭く雑布で拭がった。こいつは氣に食わない」

かういうたど。したれば歌よみが、

「なえだて旦那、ほだなことは教えね人あ悪れなだ、ここ拭くときはこいつ使え、流し前や何かえ拭くときには、こいつ使えというて教える。そいつ教えもしねで悪れというのはどうかしている」

雑布とは当て字にかけば蔵と金

あちらふくふく　こちらふくふく

したれば、なるほどそういえば福の神だ。ほだればまだ遠くは行くまいと、番頭ばつかつて、さっそく呼び戻したど。そうしたればこんど、

「いらねて言わっだんだ。おれあ帰らね」

「いやいや、旦那、詫すつから元通り来てもらいたい」

て言うて、無理むり引張つて来たど。ところが早く見つどきには、ほだんでないと見ていたわけだからだけど。普通の女としか見なかったべ。戻つて来たときに見たところが、なるほど福の神みたいだけど。そしてとうとう旦那は息子いたなさ、嫁もらつたけのよ。そして仕合せになつたど。

(横尾権次郎)

9 仁王とテンコウ

むかし、薬師さまの門番として仁王さまがいであつたど。

その仁王さまというのは、体も大きい、力もある、まず日本国中では仁王さまにかなう者はいねがつたど。ところで自分がこれだけの力もあるし、体力もあつからして、少し武者修行さ行つてみたいて、薬師さまさお願いしたわけだな。

「行つてみたいから、どういふもんだ」

「ところで、仁王、そんがえ漫遊したいだれば、行ってもさしつかえない。くれぐれも注意して失敗しないように」

て言うて、ほんで行くなれば箱さ入った奴、薬師さまから頂いたわけだ。

「仁王、この品物は九死一生の時でないげれば、開けてはならない。ただ開けてみっだいなていう心持では駄目だ」

支那に渡ったげんど仁王にかなうものはないがったそうだ。そうして行く行くに、唐・天竺にすばらしい豪傑がいたていう話を聞いたぞ。

「んでは、天竺まで行つてみんべ」

て、唐にテンコウという恐ろしく世界一だべて言われるほどの力持ちいでやつたぞ。そいつさ行つて力競べすんべと思つて、仁王さま行つたつたずだな。そしていよいよもつて行つて、

「明日にもテンコウと会うようなもんだ」

ど。つまり早く今日は旅籠屋さ着いて、ぐっすり眠むんべて、次の朝ゆっくり起きて、たらふく食つて、すこだま腹さつめて鉄棒かつねて行つたていうのだ。

村はずれさ行つて聞いてみたれば、すぐに分かつたけ。

「そこにあるすばらしい大きな家、あいつがテンコウの家だ」

て。見れば見るほど大木など屋敷のぐるりにあつて、いかにも世界の豪傑が住むような屋敷であつたけど。それで、「たのむ、たのむ」て言うたけど。ところが仁王さま、玄関まで行つて、まさか鉄棒半分ぐらいついで、土さ刺して行つたていうのだな。そして行つて「たのむ、たのむ」て行つてみたれば、弟子だ出はつてきて、客間さつて行がったらば、

「今日はあいにく先生は留守だ」

「ひやあ、そんでは何とも仕様ない」

しかし、先生の奥さんが来て、来意をつげ待つてて呉ろていた。ところがさしわたし三尺ばりの火鉢さ火入つて持つて来たけど。つまり仁王さまの一間ぐらい前さ置いたど。そしてお茶でも取りに行つたかどうか、テンコウの妻君が行つた後、すばらしい五貫匁もあるキセルのガンコ引つかけて、火鉢を引寄せんとしたていうのだ。なんぼ力出しても、その火鉢引張らんねがつたど。

ただ逃げるわけにも行かねし、自分の方から火鉢の傍さ寄ったていうのだな。

そしてお茶を出して一通りの話したど。

「デンコウと会ってはまずい」

て思つて内心恐つかなかつたど。

「別の用向き思い出したから」て。

「明日にもまた別に先生の居るときに上り申す」

て、それから立つたていうわけよ。立つたええげんど、なんぼ見ても鉄棒ないていうのだな。

「ここらさ置いだはずだ」

て見たれば、半分ばりさした鉄棒、地面にみなめり込んでいたど。そしてその上さ石一つ上げただけど。こんでは仕様ないて難儀して鉄棒やつとこすつとこ抜いで、そいつかついで逃げたええげんど、海ていうんだか川ていうんだか、入海みたいなどこさ来てしまった。なんたてそこ越えねげば抑えられるて、そうしてまず、仁王さま念仏となえてみたれば都合ええぐ、舟一そうあつたけど。

「これこそ薬師さまのお助けだ」

て、舟さのつて漕いだていうのよ。一生懸命になって漕いだていうのだな。半分ばり来たればオーイオーイて呼ばらつて、

「日本の仁王、かえれ。テンコウが今帰った。引きかえして勝負しろ」

て言わつた。恐つかなくなつたてよ。仁王さま、五・六丁離つてみても抜群の体格は大つけえし、他の弟子などより倍もあるようなガサしている。一生懸命になつて舟を漕いだ。そうしたらテンコウは何か投げてよこした。それが舟に引掛つてしまった。舟のイカリだ。そしてぎゅうぎゅうとしやぐまつで、仁王は気が気でない。

「九死に一生ぎあ、このことだべ」

て、薬師さまからもらつた箱開けてみたていうのだな。そしたらザラザラした金の棒あつけど。こいつだつて、八ぺんすつたらば切つたでだど。んだから「ヤスリ」ていうのだど。片脇は引張る。こつちは逃げんべと思つていんな、ぐいら切つたから、仁王さまのつた舟は向う側さ行つた。そこでわらわら舟から上つた。

そして逃げたていうわけよ。逃げたげんども隠れる場所なかった。ところがちやうど道路の片脇さ井戸あったけなだど。それで笠あつてうんと頑丈なあつたから、井戸の梁の上さあがつて小^ちつちやぐなつてだて。そしてすぐだまつて。テンコウは弟子の五、六人も引張つてきて、「どこさ行つた、そだえ遠くまで行くはずあない」ていうので八方見た。どこ見てもいない。

「こんでは井戸の中へ居る他ない」

ていうわけで、井戸の中のぞつて見たていうのだ。ところが仁王さま梁の上さあがつてだんだはけて、面、井戸の中さ浮きて来た。

「この野郎、井戸の中さ入つてやった」

て。何も考えなかったずだかよ、テンコウ、井戸さ入つていったてよ。つかみ殺さん入つていったてよ。そしたら仁王さま、上から降りてきて、井戸の堀石でんでん落してやったど。とうとうテンコウ、井戸の中で死んでしまったど。それからテンコウの弟子もいっぱい居つから、いそいで日本に逃げて帰つて来たど。そして薬師さまさ行つて、

「今帰って来た」

て来たど。

「テンコウの弟子さがしに来るに相違ない、絶対に、この門前からは一步も出はんな。出はつどいうど、テンコウの弟子に殺されつからて、ワラジ作りさえしていつどええ」

て、門前にいて、一生終つたていうのだど。

(横尾権次郎)

10 狐の鳴き声

むかし、徳川幕府の頃、その頃の殿さまは庶民をなやませて、大変面白くていつどきの話だけど。

染物たのみたいというて、一番上手な染屋さんさ命令を出したんだど。して、

そいつが、

「狐の鳴き声にトウタラズの様様をつけて、十日間の内に出来るように。もしも出来ないときならば、染屋さんを止めさせる。出来たときは思う通りの褒美あげる」

て言うただけだ。

そして、染屋さんは商売柄引受けねでもいらんねし、引受けだてよ。そして毎日考へても考へても、考へらんねくて一週間ぐらいはあ、御飯も食べねで寝てばりいだんだど。そしたばそのかあちゃん、

「なして、ほだい寝てばりいんだ。体でも悪いのだか」

て聞くど、

「何でもない」

ていうのだど。

「んだれば、こりや、染物に対して患らっているのだな」

て感づいっただんたてな。そして氣病は寝っだて、かえって体さ毒だから自分

の好きなこととして、将棋でもさして気持を柔らげて行けば、またたのしくもなるし、よい考えも浮かぶべというなで、お寺さまさ遊びに行くことにしたんだど。そして、お寺さまと将棋さしているうちに、「狐の鳴き声」で打ったんだど。ところが和尚さんが「コンと鳴く」で打ったてよ。「ははあ、なるほどな」で思つて、次には「トウタラズ」で受けだんだど。ところが「九曜の星」で受けて呉んだど。

「はあ、んだればやっぱり」

うれしいのなんの、元氣出てよ、家さ帰つて、紺の地に九曜の星の模様になんと染めて、殿さま取りに来るのばり待ちでいたんだけど。ところが殿さま来て、「出来たか」

「この通りできました」

て出したれば、

「ああ、みごとみごと」

て賞めて、思う通りの褒美呉て、御用染屋としてたのしく暮したど。んだから

今の世の中でも悩みのあるときは友だちとお茶でも飲んで智慧を交換して、たのしく暮すのが長生きの秘訣だべ。

(安部はる)

11 豆腐つくり

むかし、あるお寺の門前に夫婦者の家があったけど。ところがその夫婦者に子ども一人出だけだよ。そいつあ女の子であつたそう。そいつは段々と成長して、まず、年頃になつてしまつたていうわけだ。な。

ところが、その当時は世間から好ましがられるほど旦那でな、そして模範とされるような暮しであつたそう。何事も家の中でいざこざとか論じたなていうことはなくてね、世間からうらやまれるほどの家庭であつたそう。そのうち娘も年頃になつてなもんだから、嫁もらつた。ところがもらった嫁どのていうのは

偉く頭のええ奴でね、そうして何でも知しゃねものないような男であつたそうだ。その結果どうしたもんだか、舅としよっちゅう衝突するいうなだな。ところで舅親父も頑固な親父であつたがして、

「へつけない賀野郎に、おれ頭押えらつて仕様ない、折あつたらば、こつぴどくやつつけて呉んべ」

て、下心もつてあつたてなだな。何につけても親父「こうだつて」て言えば、「そいつはそうでない、この方が本当でないか」て言うて、親父ば押える。ところがたまたまある日、豆腐買って、豆腐汁、朝食だかにしたつていうのだな。ところがその親父は、齒ないわけでもあつたがして、

「豆腐はうまい、買っただけ全部食われる。皮もなければ骨もない。豆腐ぐらいええものない。なんでも駄目なく全部食べられるものは豆腐ばりだ」

て、そう言うて親父は御機嫌でいだつていうわけよ。ところが傍にいた息子ども、

「何だ父ちゃん、豆腐ばりつていうげんど、まだまだある。こんにやくだつて買つ

ただけ全部食べられる。骨も皮もない。油揚げだてその通りだ。豆腐ばりだて言うから、おれは語るのであつて、豆腐はええもんだ、こういうもんだって言えば言わねえだ。豆腐ばりだていうから、こんにやくもあれば油揚げもあると、こういうようにおれは語なのだ」

こう親父と論判始めだていうのだな。ところで親父だつて負けたくないっだな、

「ほだなこと、そなた語つていつけんども、豆腐の製法は憶えつだか、豆腐のくわしいこと語つけんども、豆腐はどういう具合にして拵えつか、製法知つてる」
て言うど、待つてましたていうような勘定でよ、

「おれの実家ていうのは、豆腐屋の近所だ。朝晩、子どもの代から豆腐はなぜ拵えつか知つてる」

「ほんじゃ、なぜして拵える」

そうしたれば、髻どの、

「豆腐ていうのは、豆をうるかして、カタカタして、そうして最後にまとまっど

きに糠とか何かで、ゴフゴフといわせて豆腐ざあなるもんだ。ゴフゴフていわせる」

「なるほど、ゴフゴフだれば豆腐だ。いや、そなたゴフゴフで豆腐になる勘定してつか。おら方ではちがう」

「なぜだ、父ちゃん」

て言うたど。そしたれば親父言うには、

「豆腐っていうものは、ゴフゴフでも拵うからだげんども、ゴフゴフで拵えた豆腐はあまりうまくない。世間一般に通用にならねえ、どこか足んねどこある」

「ほんじゃ、なぜだ」

「豆腐っていうものは、シフシフて拵うもんだ」

「シフシフでは豆腐になっかい、父ちゃん」

「いやいや、そこばり聞いたて分んね」

「シフシフで豆腐になる。シフシフで八フだ。二つ足んね」

したれば親父言うには、

「シフシフで、まず拵えたものに対して、それにニガリを入れる。そして始めて豆腐になる。ニガリ入んねえ豆腐なんて出来損いで販売用にはなんね」

なるほどこれは全く親父の方優勢になったというのだな。ほだげど親父と論じたて分んね。明るい人さ聞いた方がええんねが、どっちが正しいか聞いてみるて、

「ほんじゃ、寺の和尚さんどさ行つて聞いてみたらええんねが」

ほんで、和尚さまさお使い出して、

「明日の晩、用向きあるから、留守しねでもらいたい」

こう言うて、和尚さまさ伺つておிட்டだ。

ところで、親父も負けつたくない。こつそり和尚どこさ酒一升持^たつて、

「こういうわけで、おら家の息子と豆腐の一件で論じた。ところがシフシフ、そうしてニガリを入れ、そうして完全な豆腐になる。こう言うて呉ろ」

親父は和尚さ頼んで、ところが息子の方でまた、それより早く、

「こういうわけで豆腐というものはゴフゴフで豆腐になる。これは本当だと和尚さま、どうか言うて呉ろ」

て言うたど。親父は親父で、息子は息子で、おかしくていたど。そうして明後日あさってになるのばり待つてで、二人で行ったつてよ。

和尚はそだなことは初耳だていう格好で、

「なえだ、隣の親子二人で何用あつてござったことだい」

て、和尚はとぼけて話したど。

「なえだて、この辺では和尚さまぐらい物識りな人はござらねがら、和尚さまの言う通り、和尚さまが軍配あげた方が勝ちということにして、二人して相談して来たんだから、よつく聞いて軍配上げて呉ろ」

て、こういう具合に前置きして、

「こういうわけで豆腐ていうのはゴフゴフで拵う。親父言うにはシフシフで、そしてニガリを入れて豆腐と、こういう具合でどつちが正しいもんだべ」

て話したど。和尚はしばらく考えて、

「うん、これは難問だ」

て、戸棚から本なの出して、

「うん、これは仲々むずかしい問題だ。ここの頁にはない」

て、厚い本、みなバラバラと開いてみたていうのだな。

「こんどはようやく分かったようだ。ほんじゃ今から言うから、ああだこうだて言うんだら、おれは語らね。おれの言うことにお前だ二人とも賛成するか」

「和尚さまの言うことは何でも聞く」

「ほんじゃ、若い者から言う。豆腐というものは、やっぱりなぜ考えたって、ゴフゴフで豆腐になることには決まっているんだ」

そしたれば、聳は、

「どうだ父ちゃん、やっぱり和尚さま、世間のこと明るい。誰聞いたて、ゴフゴフで豆腐にならねえなて言う人は恐らくいねなだ。どうだ父ちゃん」

こういう具合に聳どのは早く勝負きめつだくて言うたど。

「いやいや、待て。父ちゃんの方は豆腐ていうものはやっぱりシフシフでは八フだから豆腐にはならね。ところでそれさニガリを入れれば始めて豆腐はうまく固まるんだ。ところでニガリ入れない豆腐なて出来損いで、販売用にならね。ほだ

なでは世の中は通らね。豆腐屋ていうのは、豆腐売って生計を立てる商売だ。売んね豆腐拵えたどこで何になるどこだ。貧乏になるばりだ。こんで豆腐の問題は親父の勝ちだ。シフシフさニガリを入れるということは、大抵の人間は考えはつかねもんだ。なるほど「亀の甲より年の功」で、こういうニガリを入れることまで知ってる。年功が浅いものは抜けつどこはある。これから何事によらず、お父さんの言うことは何でも聞いて、あまり口論はすね方にしたらどうだ」

こういうように和尚に言^やつて来たど。それからと言うものは知ったふりあまりしないで、仲よく暮らしてあつたど。

(横尾権次郎)

12 泥棒の改心

あるどこに、じさまとばさま二人暮ししてお蔵の中へ暮していんなだけそうだ。

そうしてたところ、夜寝っただればドガリ・ドガリて音するていうんだね。「何だべ」て耳すだてていたれば、下から手突出^っしてよこしたずも。こいつ泥棒だったど。

「ばさま、ばさま、庖丁もつて来い」

て言うたてなだ。その泥棒、恐っかないつだな。庖丁もつて来いて言うなだもな。泥棒は、いま切られつか、いま切られつかていたべ。そしたばそのばさまも氣イついて、庖丁もつて来いて言^やつただげんども、札束にぎられて、ぐいと押つけてよこしたていうなだつたど。そうして泥棒、手切られんべと思つたの、銭つかまえさせて押つけてよこしたんだほでね。喜んで逃げたど。

ところで何年か暮したればよ、

「おれも、おかげさままで仕合せになった」
て、大した礼を送つてよこしたつけてな。

13 医者のはじまり

むかし、医者なていう医者いねなだけど。その頃、少し医者気ある人は、裏板貼つたように薬草竹竿さずうつと隙間なく下げてよ、置くんだけど。頭痛いか腹いたいと言うど、長い竹竿持つてきて、ガツと打って落ちて来た草が、

「お前さ授いた薬だ。こいつ煎じて飲めな」

て、やるなだけな。

ある日、殿さまの使いの者が、

「熱病おこつた。何とも仕様ないから、見てもらいたい」

て来たなだけど。

「んだら、ちよつと行つて見つかかな」

て行つてみたらば、やつぱり真赤な顔して熱起していたんだだけどな。

「んだれば、いま三十分ぐらいもよつたらば、薬取りに来て呉ろ」

て、帰つて来たんだだけど。そして家さ来て、何という薬授けたらええかなと思つ

て、いろいろ考えたげんども考えつかねし、

「ちよつと裏さ行つて小便でもたれて来つか、こりや」

て、裏さ行つて小便たつていたれば、雨降り上りでもあつけがして、ミミズ二三匹出はつて来たんだど。それから、

「んだれば、このミミズ、殿さまさ、今日授いたんだべな」

て、喜んで、わらわら家さ持つて来て、きれいに洗つて煎じて、その汁つゆば瓶さつめて待つていたんだど。そして、

「薬もらいに来た」

て来たど。

「この薬飲ませて、安静にしておけな」

て、やったんだつて。そして間もなく二人つれで来て、

「目覚まさず、ああいう風に眠むつてで、さすかえないのだから」

「また行つてみる」

どがて言うて。そうしていたらば今度すやすやとねむつて目覚まさずねむつて

いたんだって。

「いや、こんどこそ結構なんだ。本当に助かった。目覚めるまで寝かせておけなあ」
て言うて来たんだ。そして家さ帰って来たれば殿さまの方でも喜んであ、
大した折箱もって来たんだってよ。

そうしているうちに、殿さまは治したて言うので、八方さ聞えだんだ。そして
てこんどなんと病氣の人でも来てきて困ったもんだけどはあ。

「あいつは、まぐれ当りで当ったんだって、こういうあんばいにみんなから来らっ
では、でたらめな仕事さんね」

て、褒美にもらったお金で、長崎まで勉強に行ったのが医者のはじまりだてい
うのだな。

(安部はる)

14 一休ばなし

ある家で建てまゑあるんだけど。そしてそんとき、一休和尚さんばお願いしてよ、いろいろ建てるまでもお世話になつて建てたので、一番のお客さまとしてお使いしたんだと。ところがいろいろ酒盛りしていたれば誰よりも早く和尚さんから、お祝いの歌でも詠^{うた}つてもらいたいと言うたてよ。

「んだか、んだればおれからか」

て、ほうして言つたのが、

「じいも死ね、ばあも死ね」

て言うたてよ。

「何^なていう話だ。このおめでたい座敷で、じいも死ね、ばあも死ねて、何かお祝いの言葉でもあつかどつたれば、こういう風な、おらえの家さけちつけて呉^なんだか」

て、その主人があばっだんだと。ところが、

「みんなよつく聞け、この家で栄えるには順当ということが一番大切なことで、これよりのお祝いていうのないんだ」
て言うだけそうだ。

(安部はる)

15 新宅振舞い

どこでもここでも新しい家建てるの、大ばやりだ。

ある人が相当立派な家を建てたていうわけだ。そして新宅振舞いに大勢の人招んで祝いごとしたていうわけよ。ところがそこさ一人の歌よみの先生がきて、

「何か先生、縁起のええどこ一つないかい」
て頼んだけど。

「いやある。ほだげんど、おれ縁起のええどこ詠んで行きたいげんど、解釈ばり

間違わねで書いてもらわんなね」

「いや、先生の詠むことだれば、間違いはなかんべ」

て、誰も異議申さねことにしたんだど。

「いや、ほだればええっだ」

て、そして、

この家^{やろ}ば、貧乏神がとりまいて

七福神の出る隙もなし

て書いたど。

貧乏の神のこと詠まっただげんど、ええのだから悪^われのだから…。

(横尾権次郎)

16 木蓮尊者

木蓮という人がお母さん一人で育てたんだってな。そしてほれ、学校さ入るたて勉強させるのにお金もないげば、畠さ行つても、商い行くときも何商いだか行く途中、ササギなつたな見つど、ササギ^も振いでみたり、何もかにも、ええぐないこととして息子ちや続けたんだけど。そしてそのお釈迦さまの次ぎになるていうぐらい勉強させたんだど。そしてええあんばい年いつて逝くなつたんだべあ。そしてこんど木蓮という人も勉強して勉強して、親逝くなつてからも勉強して、お釈迦さまになるぐらい神通力を持ったてよ。

「んだればこりや、これくらいなつたれば、親のこと少し考えらんねな」
ていうので、地獄と極樂見に行つたんだど。

「確かに極樂にいたはずだ」

て行つてみたげんども居ねけてよ。

「んだれば、地獄の方行つて見てみんべ」

て行つてみれば地獄の隅すまこにいて、御飯やつど火になつたりして食んなくてよくよく骨と皮ばっかりみたいしていたなだど。

「ここでは親さすまね」

て、お釈迦さまさお願いしたんだど。

「うちの母はおれに対しては、どのぐらい苦勞して、おれこのぐらいまでなつたんだげんども、今眺めてみつど、地獄の隅すまこにいた。極樂にやつてもらふことできないか」

て、お釈迦さまさお願いしたつてよ。ところがお釈迦さま、

「んだればええがんべ。お盆の七月十三日にあらゆるお寺さまば招んで野菜でも果物でも赤飯でも、全部仏さまさお供えしていただけのお寺さまに供養してもらえば、かならず親ば極樂さ行くようにしてあげる」

て、ほしてお盆の行事ていうのは、こういう風なこととするなだど。

(安部はる)

17 善光寺の由来

お釈迦さまには三千人からの弟子いだった。そのうちの偉い者が五百人いた。そいつが五百羅漢で、そのうちにもえらい三人とか四人いた。それがアナン尊者、モクレン尊者などだった。ところが印度一のガツカイ長者という人いて、そのガツカイ長者はすこぶるケチンボで、施すものは何一つしね。そしてまずお釈迦さまは仏教を説くには信者をふやさねば分んない。信者をふやすには相当の銭が要るわけだ。何とかしてガツカイ長者を信者につけようと、托鉢に行つた。せっかく来たので、鉢の子いっぱいぐらい米量つてくれるべと思つたら、

「いたましい、まず、そだな呉れなくてええ」

て、せっかく突出した米を途中から引き戻して呉れねというほどのケチだった。ところがある日のこと、その女中は米をといんだけそうだ。そのとき汁、それは捨てるもんだ。ほだからええていうわけで、鉢の子さ、

「トギ汁一杯、これだけは、おれは自由になります、つまらないもんだげんど」

て、トギ汁を上げたけど。そいつをお釈迦さまが一口飲んで、

「これは結構だ」

て、連れて行った弟子さ飲ませたて言うんだ。ところがそのトギ汁のうまいことと言ったら、何さたとえらんねぐらいうまかった。つまり女中の心ざしがうまがったんだ。そうしているうちに、アナン尊者は男振りのええ人だったど。その長者の一人娘がアナン尊者ば見染めたて言うんだ。さあ、見染めて病氣になつてしまったんだど。何たる医者さかけても治るもんでない。占い師をたのんで聞いてみっど、

「心に思う人をまず聲にもらうなら、一枚板へがすように治る」

こう教えらったど。誰だといろいろ探してみっど、アナン尊者だど。ところでアナン尊者はお釈迦さまの弟子で、

「なえつたて、そだなとこさ行かね」

て言うのだな。ほだどホレ、その娘死んでしまつていう。「ほだれば」て、お釈迦さま、いろいろ考えて、

「誰か、これはアナン尊者に似っだ仏像を作ってガツカイ長者にやったらええ」
て。んだげんども、それを作る材料がない。金というのは、竜宮のインブタン
ゴンというのがある。それをモクレン尊者を竜宮に行かせた。ところが竜宮の王
様言うには、

「これは竜宮では唯一つの宝物だ。いかに釈尊といえども、唯あげるわけに行かない」
「これほどに願っても、それを呉れらんねがよ。呉れらんねごんだら、おれにも
覚悟がある」

「いや、何と言われようと上げようない」

「ほだか、このように覚悟をきめて来た。後から謝まったなて言うなよ」

何すっかと思っていたら、鉢の子で海の水を汲んで飲んだてだど。三杯ばり飲
んだところが、海の水三分の一になったど。こんでは海の水、まるつきり干され
るって、竜宮の王様恐つかなかった。海干さつでからざあ困った。

「ほんでは、上げっさげて」

「いや、ほいつはインブタンゴンさえもらえば、海の水は元通りにしてあげる」

て、飲んだ水を吐いだてだ。そしてたれば元の水量になったてだど。そしてインブダンゴンは固くて熔けるばりしねてだな。お釈迦さまは智慧を出して使ったのが、善光寺の如来さまだったど。

そしてガツカイ長者どさ持つて行つたんだど。喜んでガツカイ長者はお釈迦さまの第一の弟子になったんだどな。

それが何年か後に、聖武天皇のときに日本に來たんだべ。そして蘇我と物部氏が争つたとき、物部守屋が難波の池さ投げたつていうのだど。それが何年かおもつて、信濃の本田善光という人が用あつて大阪さ行つたとき、夜でもあつたか、池のほとりをとぼとぼ歩いったら、「ヨシミツ、ヨシミツ」て呼べる声する。うしろ見ても先見ても誰もいねていうんだ。そして見たればお月さまの光でそこら明るくなつてゐる。池さ沈んだ如来さまで明るくなつてゐる。

それから不思議だと思つて、池さ入つて拾ひ上げて持つてきて、牛の上さ建てて祀つていた。病氣の人が何千人とお詣りに來るようになったど。それが善光寺如来さまの縁起だということだ。

18 太公望のはなし

この太公望というえらい人がいだっけそうだ。その人は毎日何仕事ざあない。雑魚つりだけだそうだな。そして毎日雑魚つりだけでも、一匹も釣ってきたためしない。

そして、おかたが、

「なえだて、おらえの親父、雑魚つり、雑魚つりって何も持って来ねで、なぜな針でつつてるんだべ」

て見たら、雑魚針みたいに曲っていねで、真直ぐなだけど。なんぼしたて釣らんねだずな。

ほしてこんど、

「はつけな、小馬鹿くさいなど居らんね」

て、夫婦別れしたんだと。

太公望はいっこうに変わりなく暮しつたど。そして何年かくらしているうちに、大変出世したていうのだな。その話聞いて、元のかが戻つだくて、ししやますだなね。

「どうか元のように、めんどろ見て呉ろ」

て来たていうのだな。

「ほだか、ほだれば、おれの言うこともある。この手桶さ水いっぱい汲んでみろ」
て、何あずけたと思つたら底ないツルべだつたど。なんべん汲んだつて駄目だ。

「そのツルべで、いっぱい汲んだら、おれあおかたにする」

ほんで底なしツルべあずけらつて、なんぼ汲んでも溜まんねつたな。

「ほんでは駄目だ」

て、元のおかたになりかねたど。

19 若松観音

若松ていうのは女中で、自分の食べものを、寝てる親さ食せて、自分は流し尻さ流つて来たものを食してたんだ。流し尻さ袋下げて溜つた米粒を自分が食つて孝行したその功德で、若松観音に祀らつたんだと。

(横尾高治)

20 娑婆の念仏

オンカカ、オントコトレ、オンサセロ、サセネキヤオンケ、オンムスル、カーン、サセロサセロテイウテモ、サセモセズ、イマサラシニボボー、ナンゾナンノヤクタツ、オシヨウサンドウダネ、マツタクダ、チゲネノマンナカダ、ソコダ、シタダ、ヘソダ、アナカシコ、アナカシコ。

21 結 句

どんびんさんすけ猿まなぐ、猿のまなぐに毛が生えて、けんけん毛抜きで抜いたれば、まっかつかつかの血が出きた。
きまりきんちやく、猫のふんどし。

22 昔話のしきたり

秋餅むかしの正月ばなし。

横尾高治 唄

三 階 節

へお盃 酒をついだか おさかなになにやら ナニヤラ
何やら 松の小枝にとまる

小たかどり コタカホイ

眺めておさかなに メデタイメデタイ

高砂や 祝いたてたる松山に巣ごもる スゴモル
巣ごもる鶴の池で 君舞え舞えと

あそぶ君が代の

ほのかにみゆる いざ式 メデタイメデタイ

七 階 節

へこの家に祝いそなえし 松と竹 マットタケ

松と竹とは この家の祝い

松と竹とは この家の祝い アー マダアル マダアル

へこの家に祝いそなえし 鶴と亀 ツルトカメ

鶴と亀とは この家の祝い

鶴と亀とは この家の祝い メデタイ メデタイ

第二部

置賜昔話補遺

小国町・他

1 瓜姫子と天邪鬼

ばさまが、

「トコロ掘りに行って来っから、機織りしてで、決して、天邪鬼来たたて戸を開けんな」

て言うて行つた。そんで瓜姫子は、

テキパキ キジヨロ

クダがないぞ

ウバヤーレ ウバヤーレ

て、瓜姫子は唄って織つてだなであつたど。そこさ天邪鬼が来て、

「つうとでええから、開けて呉ろ。ほんとの爪むぐるだけでええから開けて呉ろ」
て言わつて、開けたら、ガラリしまいには開けて、瓜姫子の髪ほどこいて梨の木
さ下げたど。そして殺した。自分がその代りになつて、ばさま帰つて来たときに
織つていだつたど。ばさまはトコロ掘つて来て茹ゆで、

「瓜姫子、まず、こがえ掘って来たから、トコロ茹でだし、機織り休んで食え」
て言うたば、つねになどきれいに皮剥いで、ちいと食うだけで、いっぱいなて
食ねなの、なんと皮も剥かねでガムガム、ガムガムと食って、なんちゅうもんだ
べ、おらえの瓜姫子、こんなことして今まで食ったことないが、妙なごんだて、
ばさまいだつたど。

そこさ鳥あさやずつたど。

瓜姫子のるべき玉のみこしさ

天邪鬼はのりーた のりーた

て、鳥鳴いたので、天邪鬼だと分って、天邪鬼は殺さつたど。

(高橋きみの)

2 笠 地 蔵

むかしあつたけど。

二人で住んでいて、お正月になるとも金はないし、笠縫ってその笠と莫蔭持つて、小国の町さ背負って行つて売つて、その金で正月買ひものして来たらええが
んべつて、じさま、ばさま相談の上に出かけて小国さ行く道中に地蔵さまいっぱ
い立ってやつて、大雨降りなもんだから、笠もなく莫蔭もなしで、頭から丸濡れ
になつてたどこ見て、

「いやいや、可哀そうだな、こがえなこととして地蔵さまあまり可哀そうだから、
まず正月何食つても過ごされんべから、莫蔭着せて、笠かぶせて、そして帰るべ」
て帰つてきたんだ。そしてばさまに語つて聞かせたら、

「ええがった、ええがった。おらなど家さ入つて、こうしているもの、たとえう
まくないもの食つたたて、この寒さにこうしている地蔵さま、なんぼか喜んでい
たべあ、おらなど家に住まいしていんなだから、ええがった。ええがった。ええ

ごとした、じじさま」

て、こうばさま、言うたちゆのよ。

そして夜そんな話して寝ていたら、なんと、ヤヤアヤヤアと外で若衆の音あする。

へ ヤンゾウ屋形さ もうちいとだ

ホレ がまんしろ

ヤンゾウ屋形さ もうちいとだ

かけ声でやって来たずなだ。

「おれあ貧乏で正月ないものもひえねえど思つて、若衆は馬鹿にして何をおら家さドダガダて持^たき込むやら」

て、寝てて想像しつたつて。そして人の音もしねぐなつたし、「何いたずらして持つて来て行つたもんだかわかんね。馬鹿にするにもほどがある」

みたいなこと語つて、じさまとばさま起きてみたていうなだ。そしたら、お正月の酒から肴から、御馳走いっぱい持^たき込んで地藏さまが恩返しに來たなだど。

とーびん。

(高橋きみの)

3 蛇 蟬 入

水かけ、田さ行つてみつど、水なくてなんとも仕様なくて、

「前田千刈さ水かければ、裏田千刈は干るし、裏田さ掛ければ前田は干るし、これ双方さ、なあ、一ぺんに水掛けて呉れるものあれば、娘三人も持つてだが、どれでもええな呉れる」

て、水かけに行つて喋つたずなだ。そうすつど若い者あ出て来て、

「いや、おれあ双方さ水掛けるようにして呉れつから、娘呉ろ」

て言うたど。そうすつど、

「こんなこと言うたて、どれ、おいという子どもいないし」

あまり心配して頭病^やめるていうて寝たずだ。そうすつど一番大きいのが、

「とうちゃん、起きて御飯食え」

て言うたども、

「いやいや、何も食いたくない。ほだども、おれの言うこと聞いて呉れば起きて食うども」

て。

「何のごんだか、ほだら語ってみろ」

て、そして、

「いや、こういう一言語つたれば、若い者あ出てきて、いつときに水掛けてもらつたから、お前嫁に行つて呉んねえか」

て言うたれば、

「何もんぼれこいでけつかる」

て、枕蹴つとばさつだど。そして二番目もその手で来て、じさま頼んだどもそれも聞いて呉んねえ。一番末っ子が、

「あまりええ、おれあ行ぐがら、とおちゃんのためだれば、どんな人なり親孝行の一つだから」

て、承知して行くことにして、それが実は蛇体であつたつだ。

どこかのひっこんだ沼に住んでる蛇体だどな。娘は蛇体だちゅうごとはわかつていたから、

「蛇体のおかたに行つて沼に入るのだから、ひょうたんさ針千本入つて呉ろ」

て、とうちやんから針千本買つてもらつて、そして蛇体の沼さ行つたわけだ。

そして沼さ入るとき、その女も入る。そして逆ささかにしてひょうたん持つて入つた。

ひょうたんが浮きて、沼うちあちこち歩あるつたども、その針が蛇体のこけらさみな刺つて、鉄は毒なもんだから、蛇体は死んで、その女が家さ歸つて来たどな。そしてそれが後とりになつて、まず安樂に暮した。やつぱり親のいうことは聞かんかねと言ふなべ。とーびん。

(高橋きみの)

4 南の山の馬鹿髻 — 唐傘 —

南の山さ、馬鹿髻いだったど。

嫁に来たとき、天気わるいとき、みな唐傘、がらがらとさして行つたもんだから、

「あんなものさして家さ入らつではたまらね、まず」

て言わつて、嫁はその家さ入らんねくて、次の晩げ帰つたどか。

(高橋きみの)

5 南の山の馬鹿髻 — 風呂 —

南の山さ馬鹿髻いだったど。

嫁の家さ行つて、「風呂さ入れ」て言われて風呂場さ行つて見たば、蓋の上さ猫あ

ちよこんと眠ぶかけしたど。

「ははあ、こうして風呂さ入んのか」

て思つて、聾は猫ば追っぱらつて、猫みたいに風呂の蓋の上さ、裸でちよこんとねぶかけしたけど。嫁の親は、

「こんな聾さ娘やらんね」

て、取りもどしたど。

(高橋きみの)

6 玉川太郎と慶次之介

玉川太郎が「ドウ」つけて魚獲りに行つてだな、それ盗みに行つて、ドウば慶次之介がとつて、ここまで五^{いっ}あごで来て隠れた。玉川太郎は袂さ入った石三つをこっちさ投げてよこしたど。道下さ二つ、河越えて来んべどて慶次之介は葛つる

さ足引かけて転んだって。そして転んだところが「丸山」で、そこには葛つるが生えないど。

(高橋きみの)

7 果てなし話

ボタンと落ちては、くりつとむけては、ころころと転び、いつまで経ったて、ほれ…。

(高橋きみの)

8 姥

捨

六十一才になつど、殿さまに差し出せと言われたもんだ。んだどもやりたくないごんだ。んでは、「灰で縄なつてさし出せ、出したら年寄りとりあげんのやめる」という。「困ったごんだ」て、家に帰つて相談した。そしたら、

「そんなこと造作ないごんだ」

こうすればええでないか、縄なつてそれをそっくり焼いて、それを殿さまさ差し出したらええべて言うたど。

んだから、いざというときはやつぱり年寄りはたよりになるど。

(高橋しのぶ)

9 かちかち山

じさま、刈野の豆蒔かのきに行つてで、

「一粒、千粒になれ」

そこさ、むじな出てきて、石さ腰かけて、

「一粒、一粒できつかれ」

て、こう言うたど。そうすつどじさま鍬で「この畜生」て叩く氣になつたど。

そうすつど逃げられ、翌日、モツチ持つて行つて、石さ塗つておいた。そして叩いたんだど。そうすつどむじなは死んだふりしたど。じさ、家さ持つてきて、

「晩げ、むじな汁しておけよ」

て、また山さ行つた。ばんさ、小屋で米搗きしてだら、むじなは、

「ばさ、ばさ、おれ搗いて呉れんべ」

て言うた。

「いやいや、じんつあにおんつあれっから、ええ」

「いや、またじんつあ来る頃、おればまた下げるんだ」

て、こう言うた。そうすつど、ばさまが下ろして米搗いてもらった。

「ばさ、ばさ、搗けたかなんだか見ろ」

て言うた。そうして見るどこ頭搗かつで、そしてばさまの着物きて、ばさに化けでだど。そしてばさまの肉剥い^はでむじな汁拵えてたと。

じさま帰つてきて、

「なんだか、このむじな、しないな」

て言うたど。そうすつど、

しないもしないも道理がさ

むじな汁食つて

ばば汁食つた

踊つて逃げあがつた。そうすつどじさまが不思議に思つて縁の下見た。そうすつ

どばさまの死骸があつたど。じさま悲しんでいたどこさ、兎来て、

「何して泣ிட்ட」

て聞くと、そうすつど、

「こういうわけで殺さつた」

ていう。

「仇^{かたき}とつて呉れつから、泣くなよ」

て言うたど。

兎がむじなどさ行つて、

「柴刈りに行かねか」

て誘い出した。そして柴とつたな、むじなには燃えそうな背負^お寄せた。途中まで来ると兎が、

「ああ、病^やめてとても歩かんね」

て言うたど。むじなは、おれの柴の上さあがれて、柴の上さあが^くて呉^くつたど。カチンで火打ち石で火をつけつど、

「何^{なん}しつた。火打ち石のような音^{おと}すんな」

「あれはカチカチ山のカチカチ鳥^{とり}よ」

て、兎は答えたど。そのうちにボンボンと燃えると、ピョンと跳び降りて逃げ
て行つた。そして家さ戻つど、南蛮と味噌とねり合せて拵つた薬、むじなの家の
前を通つて、

「火傷の薬はいらんかあ」
て行つた。

「ああ、切ない。ああ、切ない。早くつけて呉ろ」
て言うたど。そうすつど背中じゅう味噌つけて、ゴデゴデで塗つて呉つたど。

「はあ、痛い痛い、痛い痛い」
て苦しむとき、

「ばばの仇討ちだ」
て逃げだど。そして逃げて、

「いやいや、兎、兎、おまえ、この間はひどいことしたな。おれの背中さ火点^つけ
て逃げたではないか」

「それはカチカチ山のカチカチ兎だべ。おれは薬売りの兎だから知しやね」

て、杉藪やぶさ行つたつて。そしてこんど舟を彫つてだつて。そさ、今度ようやく背中治つて、むじな、そこさ行つたど。

「兎どの、兎どの、お前はひどいことする。おれの火傷の背中さ南蛮味噌塗らつだ」

「それは薬売りの兎で、おれは杉藪の兎だから、おれでない」

「それ、何するもんだ」

「海の川さ持つてつて、のつど面白いもんだ」

「おれに一つ造つて呉んねえか」

「あまりええどこでない」

そして、自分のなは、杉舟。むじなには土舟造つて呉つじやど。そして二人で磯までもつて行つて川さ浮かべだど。そして、

杉舟、こんと行け

て叩くと、兎の舟はすうつと行つた。むじなは、

土舟、こんと行け

て叩くど、ザクツと割れて、川さ落ちて死んだけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

10 田の神団子

いそがしいので、田の神団子上げていらんねくて、稲を上げて、荷背負いに行つたつて。したらば、ピチャピチャ、ピチャピチャと後から足音がした。

「んが子、火さくべて呉^くつた」

そう言わつてあつた。そうして見たどこが何もない。そして家さ帰つて見たば子ども火さくばつて火傷していたど。んだから何忘つても、田の神団子だけは忘れんなよつて教えらつた。

(川崎みさを)

11 神武天皇のはなし

神武天皇は弁天さまの子どもだ。

あるとこの一人の男さ女が泊めて呉ろと言わつて、その女をかせがせていたところが、妊娠した。そうすつと、

「人の見えないどこの土で家を拵えて呉ろ」
て。

「今にも出来つから早く早く」

て言わつて、まだ屋根も出ないうちに産なしたど。そして、
「決して、おれのお産したどこさ来ないで、見ないで呉ろ」

それでも見たいものだし、少し隙あけて見たところが、大きな蛇あ、きれいな玉のような子どもを産して、ぺろぺろ舐めつたど。そうすつじど、たまげて、

「われあ体見らつた」

て感づいてはあ、

「おれあここに居らんねがら、育てて呉ろ」

て、蛇になって、竜宮さ帰って行つた。そうして生まつたのが神武天皇だど。

(海老名ちやう)

あ　と　が　き

東根市東方公民館にお邪魔したのは田植のはじまる直前のことで、滝口国也氏のあっせんによるものであった。その地区の区長さんの伊藤正作氏はじめ話者の方々に大変御世話になった。この地区は昔から「タバコ」の名産地で、子どもの頃から、正月前にタバコの葉のしの仕事を手伝わされたものという。囲炉裡をかこんでタバコの葉を火にかざしながら一枚一枚のす仕事は大変で、その代わりに昔話を語ってもらったという。老いも若きもみな正月までに「タバコのし」に追われたという。そんなことがまた昔話の中でも世間話の方が多くなるのであろうか。特にこの地方では若衆小屋などではなく、若衆だけの集まりも多くはなかったという。

小国町の昔話は、昭和四十一年の八月に奥村幸雄氏と調査に行ったとき、未整理のままに記録しておかなかったものが十篇ほど残されていたもので、中でも高橋きみの氏はすばらしい話者であったが、去年逝くなられた。残念なことである。

今は氏の御冥福を祈るばかりである。高橋しのぶ・川崎みさをの両氏はすぐれた小国町大石沢の百話クラスの話者である。海老名ちやう氏は御存知の白鷹町の話者である。記して感謝申し上げる。

昭和四十七年五月二十八日

カマイタチ

東根昔話集2・置賜昔話補遺

昭和四十七年五月二十八日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二二二の三

山形短期大学民話研究センター資料叢書

カマイタチ

東根昔話集2・置賜昔話補遺

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十一年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつばの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌ才さんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)